
風邪をひいた日は.....

てんのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風邪をひいた日は……

【Nコード】

N1202P

【作者名】

てんのすけ

【あらすじ】

大切な時期に風邪をひいてしまった男の子とそれを気遣う彼女の女の子のお話です。

（前書き）

初めまして。よろしくお願いします。

体調管理は受験を控えた学生にとって常識とも言えることだ。

それは誰もが知っているし、それを怠ったせいで人生の大切な時間を無駄に費やしてしまう、そんな人間も存在することも知られている。

そんなふうに、一度転んでしまってから起き上がる人間は一般的に強いと言われるが、僕はそう思わない。

転んでしまわないように注意深く生きている人間の方が強いと僕は思うのだ。

負けから学ぶこともあるのだろうけど、勝ち続けることで学ぶこともあると思う。

だから、僕も勝ち続けられるような強い人間を目指して今まで生きてきた訳なのだが――

センター試験の大成功もつかの間。

二次試験直前に、僕はやってしまった。

「ああ、インフルエンザですね。反応は陽性でしたし……。お薬は出しておきますので、しっかり休養してくださいね？」

インフルエンザ簡易検査キットの結果を淡々と話しながら、最後にはにつこりと美人医師は微笑んだ。

笑えない。うん、それ、笑えないよ。先生……。

貴女にかかりつけるようになってから感謝はすれど、不快に思ったことはないのに。

まあ、今回の事は全面的に僕が悪いんだけどね。

ああ、うがいをしなかった2週間前の僕……。死んでしまえ、チクシヨウ。

昨日なんか学校から帰ってきたときに手を洗うの忘れてた。チク

シヨウ、昨日の僕。頭からローションかぶって南極にダイブして来
いってんだ。

というか！ 予防接種してどうして感染するんだよチクシヨウ！！
薬をもらって病院を出たあたりから猛烈なダルさが襲ってきた。
「ダリイ。このダルさはもう世界規模だな」

そんな訳で今の僕は気分がダダ下がり。そんな気分の上に襲って
くるダルさ。

やってらんないね、マジで。

最後の追い込み前に急ブレーキだし。試験に間に合うかなあ……。
ホント、どうにかしてくれないかなあ？

ぼろぼろの精神状態と比例するような足取りで僕は自分の部屋を
目指して歩く。

ああ、これが転ぶってやつなんだ。

こんな人間になりたくないって思ってたのになあ。チクシヨウ。

部屋に戻ってすぐ僕はベッドに直行した。

歩いていて思ったが、病状はどうやら深刻だったみたいだ。

体は燃えているのかと思うくらい熱いし、頭はぐわんぐわんと鐘
が鳴るかのように響く痛みが続いているし、体の節々もそれに呼応
するように痛む。

吐き気はしないが、何か食べると言われたらもれなく食べたもの
を戻すことになるだろう。

端的に言えば、最悪だ。

今の僕は心身ともに最悪な状態にある。

「って、下がるな下がるな！ 落ち着いてシス単でもやって英語に
触れてないと……」

ベッドに寝転がりながら使い慣れた英語の単語帳を開いてみるが、
文字が歪んで見えるし、見えても当然のごとく頭には入っていく気

がしない。

「concentration, concentration, concentration」

たまたま開いたページの単語を何度も繰り返す。

集中はバツチリ。でも入ってこない。ああ、当然か。具合、悪いんだもんな。

なんてつたってインフルエンザだし。

いくら流行っているからってこんな流行には乗りたくなかったのに。

そんな時だった。

トントんと、控えめなノックの音が聞こえてきた。

「どうぞ……ゴホッ、ゴホッ！」

掠れた声で答えた後に、思わずせき込んでしまう。

今さっきまでせき込んでなかったのに。

一度せき込んでしまうと止まらなかった。

壊れたバイクのエンジンみたいにせきが吐きだされていく。

「シス単……。勉強はほどほどに。レイジ。風邪をひいたんじゃないのかっただの？」

「キヨウ、か。どうしたの？　ゴホッ、ゴホッ！　僕は見ての通り絶賛インフル太郎だけど？」

せき込みながらも、首だけを動かして涼やかな声の持ち主に顔を合わせる。

先ほどノックをして部屋に入ってきたのは彼女のキヨウだった。

キヨウはいつものように無駄に整った顔で無表情を作り、僕を見下ろしていた。

「インフル太郎なら大人しく寝てなよ。今英語を見つめても非効率の極み。レイジの嫌いな時間の無駄ってやつじゃない？」

腰のあたりまで伸ばされた綺麗な黒髪を手で払いながら、キヨウはため息をついた。

ため息をつく時でさえ無表情は崩さない。いつもこんなふうに物

事を言われるから地味に傷つくんだよな。

「そんなこと、ないよ。こうやって寝てる方が時間の無駄だ。だからこうやって……」

「いいから寝なよ。それとも寝かされたい？ 主に物理的に」

ダメ押しのようにに言われると思わず黙ってしまう。

「インフル太郎に言うことじゃないだろ、それ……」

それでも言葉を搾りだしてみると、すねた子供のような言葉が出てしまった。

「インフル彼氏を心配する彼女のセリフ、なの。だから、寝て」

彼女は相変わらずの無表情で僕に布団をかけ直した。

「一緒の大学、行くて約束。守ってくれるんでしょ」

「推薦でさっさと決めたキョウに追いつかなきゃいけないだろ、だから……」

僕がさらに言葉が続けようとすると、彼女は僕の額に自分の手をのせた。

彼女の手は冷たく感じるのに、心地よい暖かさを感じるそんな矛盾した気持ちを覚える手だった。

「私の彼氏はセンターで成功した。判定はA判定。試験の配点はセンター8割とペーパーテスト2割。不安なのは分かるけど、私からすれば落ちる可能性を模索するのが大変」

「でも、その落ちる可能性が今……」

彼女は僕の言葉をさえぎるように、そして、いつもならば考えられないような感情のこもった声で言った。

「いいから。今は休んで早く治すことを考えて。大学に落ちたってどうなったって今、レイジが苦しんでるのを見ていたくないの。だから、早く治すことを考えて」

そう言ったキョウと目があった。彼女は穏やかなのに強さを感じるほほ笑みを見せた。

なんでだよ。

めったに笑わないのに何で今、笑うんだよ。

なんだろ、キヨウを見てたら眠くなってきた。
目を閉じる。

眠気は加速していく。

僕は正直、今のままだと勝利を目前に勝負に負けてしまおうと思う。
今まで嫌だと思ってきた転ぶ人間になっちゃおう。

それでも、それもいいかなあってどうしてか思えた。
訳分かんない。

でも、その考えの中心には何故かキヨウの無表情な顔が見えるんだ。

ああ、こんな問題が二次試験に出たら絶対落ちるなあ……。

眠気が最高潮に達して、僕は眠った。

今の僕に未来は見えないけど、たとえどんな結果でも明るいんだろうなあと思う。

そう思う根拠はやっぱりキヨウなんだけだね。

はあ、分かんね……。

（後書き）

感想、ご指摘を頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1202p/>

風邪をひいた日は.....

2010年11月24日21時10分発行